長崎県地学会誌　第48号　11－12，図版　IV（1988）

雑　　録

芒塚（去来碑）と含球安山岩

鎌　田　泰　彦（長崎大学教育学部地学教室）

Susukizuka (Kyorai's *Haiku* Monument) and Ball Andesite

Yasuhiko KAMADA

長崎の市街地より国道34号線をたどって郊外に出る時は，まず日見トンネルを通り抜けることになる。その昔，長崎街道の最後の難所であった日見峠をくり抜いた日見トンネルは，大正15年（1926）に開通している。この掘削工事中に，見事な含球安山岩（ball andesite）が産出したということで，好事家の間でつとに有名であった。

日本地学研究館（京都）の館長である薬学博士益富壽之助先生の名著「原色岩石図鑑」（保育社）は，初版が昭和30年３月に発行されているが，その第39図版，第１図には，この日見峠産の「含球安山岩」が図示されている。しかし，昭和62年９月30日の「全改訂新版」では姿を消しているのは誠に残念である。従って，ここで参考のために，初版本の説明文を再録させて頂くことにする。

1．含球安山岩ball-andesite……長崎県西彼杵郡日見村峠産

暗紫色斑状の安山岩で，大小の球状団塊を多数含む珍しいもの。これと同様のものが，鹿児島県牛尾金山からも産し，九大種子田定勝氏の研究がある。ともに両輝石安山岩で，球状団塊と充塡部とは鉱物成分，組織に於て大差はない。

種子田定勝（1950）の鹿児島県牛尾産の含球安山岩の研究によれば，母岩をなす両輝石安山岩と球状団塊とは，ほとんど同質の岩石よりなり，しかも団球内の結晶が同心円的や放射状に配列する傾向は全くないことが明らかにされている。成因としては，含球構造の形成が，主として本岩形成の最晩期における揮発成分（FeCl，NH_4Cl，Alkalies等）の移動集積によるものだろうと説明している。

また，種子田博士と協同研究を行った国分信英（1949）は，団塊のまわりの母岩との接触面の黄褐色物質の化学分析を行い，主成分のFe_2O_3/FeO，Na_2O/K_2Oなどが他の部分と比べて大きく，副成分ではクロール，アンモニアなどが相当に濃縮されているため，若干の揮発性成分が接触部に濃集することが，団塊の成因を解く鍵であろうと述べている。

長崎大学教育学部地学教室の標本陳列棚の中には，日見トンネル掘削の際に採集されたといわれる立派な含球安山岩の標本が納まっている。これは長崎師範学校時代の標本であり，多分，外山三郎先生（長崎大学名誉教授，昭和61年９月８日没）の蒐集品と思われる。団塊の大きなものには，直径が9.8，8.8，8.2cmなどがあり，団塊の抜け跡（雌型）のついた母岩も一緒に保存されている。

長崎県内の含球安山岩の産地として，日見峠以外には西彼杵郡多良見町喜々津にも知られている。昭和42年９月24日に行われた長崎県地学会の第36回日曜地質巡検会の折，喜々津駅南西方の中里名樋ノ口において，道路工事で削られた新しい露頭で発見されたものである。団塊の大きさは，最大７cm位の長径をもつ，やや楕円体のものが多く，

小さいものでは1～2cmのものが母岩中に無数に含まれていた。団塊の表面には小凸面が連続し，まるで「蜂にさされたこぶだらけの頭」といった感がある。この時の巡検会の模様は，藤田光(1967)会員によって報告されている。

日見トンネルの東口を出て左カーブを曲がった所に，「芒塚」（すすきづか）のバス停留所があり，その左手に登り道がある。昔の長崎街道にあたり，日見峠に通ずる道で，車も充分通ることができる。国道から徒歩でおよそ5分も登ったあたりの右側で，史跡「芒塚」の案内板が目に入る。

松尾芭蕉の高弟である長崎生れの俳人向井去来が，元禄2年（1689）に帰郷して京都に戻る時，日見峠で見送りの人達との別れを詠んだ

君が手もまじるなるべし花薄（すすき）

を刻んだ句碑がこの芒塚である。天明4年(1784)に，長崎の俳人達が，日見峠の一本杉の近くに建てたものであるが，安政3年（1856）に現在地に移された。芒塚は，昭和29年（1954）5月14日に長崎県の史跡として，文化財の指定を受けている。

芒塚は建立されてからすでに150年もの長い間，風雨にさらされていたことになる。最近，長崎市の俳人グループの間で，この句碑の風化を心配する声が上り，長崎市文化課に保護対策を講ずる様にとの陳情があった。そこで，昭和61年9月13日に文化課の依頼で，長崎県文化財保護審議会委員の丹羽漢吉教授（建築学）と共に，現況調査と保護策の検討を行った。

現地を訪れてまず驚いたのは，句碑の上に乗っている狛犬（高麗犬）が前足をかけている玉石が，正に日見峠産の含球安山岩の団塊そのものであったことである。直径は13～15cmもある大きなもので，表面には丸みをおびたこぶもいくつかそなえている。

句碑は，土台石として長さ120cm，幅60cm，高さ35cmの自然石の上に，長さ65cm，幅40cm，厚さ40cmの角材を置いている。俳句を刻んだ石柱は高さ70cmで，断面は楕円形（長径40cm，短径25cm）に整形されている。その上には，石を刻んだ狛犬（こま）が載せられ，大きな目をむいて右後方を睥睨（へいげい）している。

現地の立会調査の結果，句碑の風化侵食を防ぐのには，直接雨を当てない様にするのが最も適切な方法だろうという結論に達した。しかし，完全に小屋に入れたのでは，句碑のまわりの風情をそこなうので，屋根をかける程度で充分雨露は防げるし，景観をそこなうこともなかろうということになった。

それから2年たった昭和63年の秋も深まった日曜日，家内を伴って日見峠越えの散策を楽しんだ。再び芒塚を訪ねると，がっちりと角材を組み合せた簡素な屋根がかかり，句碑の上の魔よけの狛犬（こま）も，安堵（あんど）の表情で私達を暖かく迎えてくれた。

参考文献

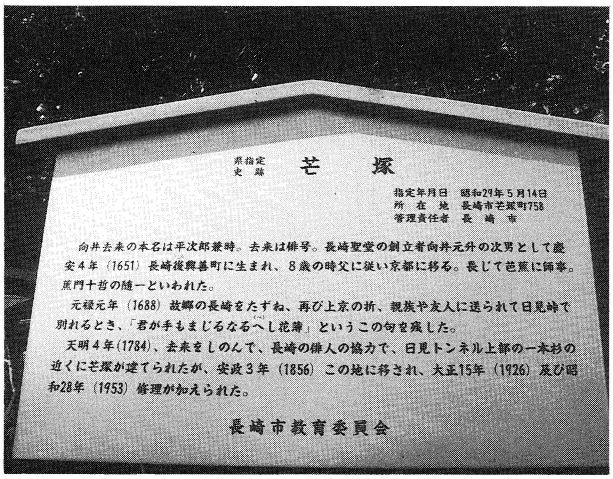
藤田　光（1967）：多良見町喜々津附近の地層と火山岩類　長崎県地学会誌　10号，23－25.

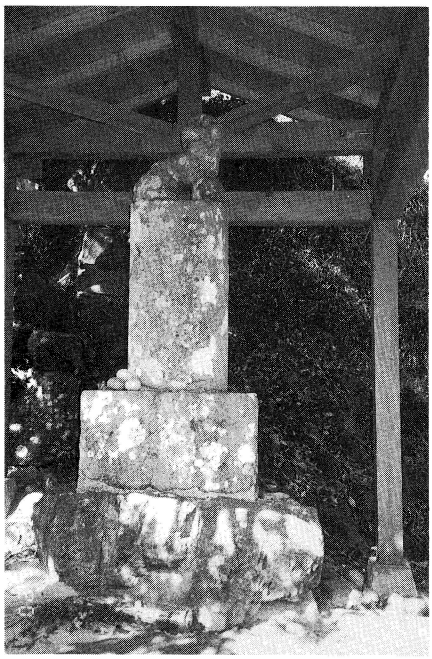
国分　信英（1949）：いわゆる‘含球安山岩’について　科学　19巻，10号，474－475.

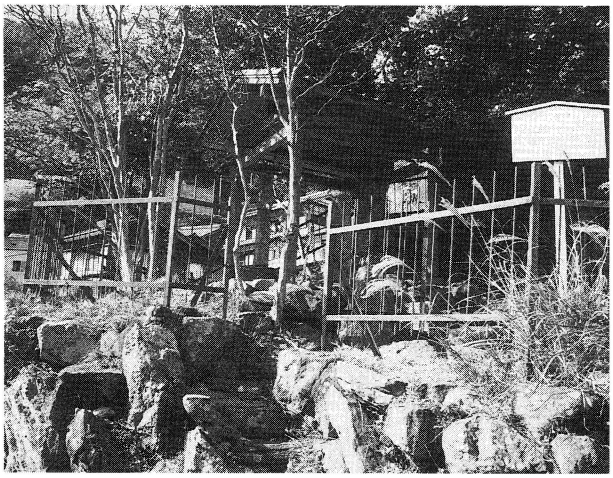
種子田定勝（1948）：鹿児島県牛尾金山の所謂含球安山岩（講演要旨）　地質学雑誌　54巻，635号，99－100.

――――（1949）：鹿児島県牛尾産及び長崎県日見産“含球安山岩 Ball andesite”の観察並びに成因考察（代読）　地質学雑誌　55巻，648－649号，149.

――――（1950）：含球安山岩（Ball Andesite）について (1) (2)－特に鹿児島県牛尾産複輝石安山岩について－　鉱物と地質　3巻，6号，238－244；4巻，1－2号，20－24.







長崎県指定史跡「芒塚」，向井去来の句碑の上には含球安山岩の団塊が載る。